想像・創造されるトランスナショナル家族

日本とフィリピンを往来する若者移民を事例として

大阪大学大学院人間科学研究科　原めぐみ

1.　目的：

発表者は、フィリピンで育ち成人になるまでに来日した若者移民について研究している。本発表では、かれらのトランスナショナルな家族経験と、かれらがもつ家族の理想像を紐解いていく。ここでトランスナショナルな家族とは、二国以上にまたがって繋がりを維持しようとする家族と定義する。これまでトランスナショナル家族は、移民の利益や資本としてのネットワークの役割を果たす一方で、家族の絆が義務感を強化し、移民の負担にもなっていることが指摘されている（Parreńas 2005）。若者移民の多くは、日本に住んでいる母親などとの「家族再統合」を目的に移動している。

2.　方法：

フィリピン・日本の数都市において複数地調査を行い、１５人の若者（１５～２８歳）を対象に、かれらの生活史に関するインタビュー調査を行った。調査参加者となったものは、①日本に住む母または継父に呼び寄せられたフィリピン籍者、②フィリピン日系人３世・４世、③日本人父親とフィリピン人母親をもつ新日系人（JFC）のいずれかである。１０代後半から２０代の若者を対象にすることにより、これまでの家族生活、現時点での家族価値、自分たちのために創造しようとしている今後の生活など層が生まれる（Olwig 1999）。これら語りから浮かび上がる層の間に生じるズレや矛盾にも着眼し分析していく。

3.　結果：

フィリピンより来日する若者移民の特徴は、移動することによって家族の構成員が大きく変化するため、社会環境だけでなく、家庭内の事情も劇的に変わるということだ。その中で、親からの金銭的な裏切りや、文化的価値の食い違い、フィリピン人である母親の日本での位置への眼差しなど多くの摩擦や葛藤を経験する。しかし、初めは受動的で選択の余地のなかったものも、やがて自我が芽生え、親と交渉したり反抗したりしながら、フィリピンへの単身帰国やアメリカへの留学、日本国内で親元を離れて一人暮らしを始めるなどの主体的な選択ができるようになる。

家族像に関しては、幼い頃に経験した「フィリピンの家族」を「愛するホーム」と美化して語るものもおり、来日してからの家族経験がフィリピンへの望郷の念を助長していると言える。そして今後は、自分が理想とする「家族」を作っていきたいという希望をもち、離れた家族とインターネットを通して連絡を密にとったり、フィリピンに住む婚約者を呼び寄せたりという事例が見られた。現在の自分の家族を「混沌とした（magulo）」と表現する比較対象として、「完全な、みんながそろった（kompleto / buo）」が理想型だと述べることなどからも、強い家族規範に自ら囚われていることがわかる。

4.　結論

子ども期の移動は受動的であることが多い。家族再統合の結果、フィリピンと日本両方の家族規範の板挟みになり、新たな課題が生じてしまう。こうしたトランスナショナルな家族経験を経て、若者たちは衝突を回避するため、自らの流動性を武器に再び移動し、家族関係から物理的に抜け出そうとする。しかし、家族規範に当てはまらない家族環境の中に育ってきたがゆえに、強い家族理念をもつ若者移民は、ー多くの場合、意図せずトランスナショナルなー家族の形成を思い描くのであった。

文献：

Olwig, K. F. (1999). Narratives of the Children Left Behind: Home and Identity in Globalised Caribbean Families. *Journal of Ethnic and Migration Studies*. Vol. 25. No. 2: pp. 267-284.

Parreńas, R. S. (2005). *Children of Global Migration: Transnational Families and Gendered Woes*. Stanford University Press.